

秋野豊筑波大学助教授

第2回報告会 講演録

旧ソ連をとりまく6つの真空地帯から

—ルポ、分析、予測、そして提言—



1995年3月22日（木）

於キャピトル東急ホテル

主催 笹川平和財団



目次

はじめに	1
ロシアの真空	1
エネルギーのパイプライン	3
ロシアの政策－3つの流れ	3
CIS統合とソ連（ロシア）の復活度.....	7
中央アジアのベルト	9
グルジア問題とチェチェン侵攻	10
総括.....	14

秋野豊助教授プロフィール

1950年生まれ

早稲田大学政治経済学部卒業

北海道大学法学部修士 北海道大学博士課程修了（法学博士）

北大法学部助手、英国国費留学生としてロンドン大学に学ぶ

在モスクワ大使館でソビエト外交政策調査員

現在、筑波大学助教授

1992年9月より東西研究所のヨーロッパ・センター（在プラハ）主任研究員

はじめに

前回の講演の後、中ロ国境とチェチェンに入る予定でしたが、けがのために調査が十分にできず、大変残念です。

これから動きがあると思われる地域に3～4個のシナリオを作り、それに合わせて自分自身が動いていろいろな人間に会うという方法で調査をしています。小さな国の場合、飛び込みでも大統領が会ってくれることもあります。また、各地域ごとに用意したシナリオをどう組み合わせるかを考えています。今回は動きがありそうな部分、地政学的に地図が大きく変わりそうな部分をいくつか指摘いたしましたが、本日はそれらをフォローする形で、94年12月以降にどのような変化があったかをご報告いたします。

前回に続いて、真空が旧ソ連のまわりに5～6個見えるというところからお話しさせていただきます。

ロシアの真空

19世紀の中頃から、ロシアとイギリスの力が張り合う場面が何回かありました。バルトの上から地中海を通り、インドそして極東までつながる線があります。中東付近に関してはこの線を3つに分けることができます。北側のロシアの地域と南側の中東の下の方（アラブ）、そしてその中間にある中東の北の部分です。中東の北側にはトルコやイランやアフガニスタンなどの非アラブの国があります。この辺りをめぐって、19世紀にイギリス・アングロサクソンとロシアの力がぶつかっていたわけです。それが20世紀に入るとドイツが出てきてこの対立が薄れましたが、冷戦になってやはりこの線が問題になりました。親米のイランがひっくりかえったり、インドがソ連からひっくりかえったりという変化がいくつかありました。さらにアフガニスタンで侵攻があり、もめました。ただ、中東の北側ベルト地帯は基本的に真空とい

えるほど流動的ではありませんでした。ところが今、この中東の北の部分めぐっていろいろな真空状態が生まれているということが言えると思います。特にロシアのコーカサスから中央アジアにかかる部分が8つの独立国家に分かれたので、問題の中東の北の部分とロシアの下の部分とが合体して大きな混乱が起こっているという状況です。まだしばらく収まりそうにありません。この辺が、最近私が焦点として主に歩いている地域です。イスラムの世界とスラブの世界のちょうど中間を歩いていることになります。これが第1点目です。

第2点目は、今起こっていることを理解するためには、通常の国際政治と少し違った観点から見る必要があると思います。つまり「真空の政治学」が起こっているということです。通常の場合、国はある種のデザイン、つまりこうしたいという意図をもって世界に働きかけるわけです。さらに、それを実行する能力も必要です。その意図と能力、そして環境の組み合わせから国際政治を読むことができるわけです。しかしこの真空の政治学では相対的な力や状況の差がものを言う、つまりはっきりとした意図をもっていなくても、またその意図を実行できるだけの能力がなくても、相対的にどこかと地理的に近かったり、対抗馬よりも少し力があるというだけでその真空の中に入ることができる、もしくは招き寄せられてしまうということがあります。そういう意味で非常に読みづらいのが真空の政治学です。

ロシアの動きは非常に分かりづらいものです。弁護的に聞こえるかもしれませんが、エリツィン政権には真空が生じていることを理解してほしいと思っています。従って『ある勢力が新しい秩序の中で、それなりの意図と能力をもって入ってくることはかまわない。一定段階が過ぎた後に新しい秩序を作り、それを維持するだけの力があるものが残ることもかまわない。しかし、そうではない形で真空に吸い寄せられてきた場合には、後

で非常に大きな混乱が起こってしまう。従って、少し待ってほしい』と言っているのです。『ソ連邦が崩壊後に起こった真空を最終的に埋めるのは自分たちである。従って、入りやすいからといってそう簡単に入らないでほしい。真空の状態で新しい秩序が生まれるわけだから、もう少し待ってほしい』というのが最近のロシアの主張と書いています。そういうものがいろいろ個々の政策の陰にあります。

真空の政治学の場合にポイントとなるのは、今まで見えていなかったいくつかの新しい線が何本か見えてきており、その線がどうつながるかによって大きな影響が出てくることです。1つにはガスや石油のパイプラインをどう引くかによって、大きく真空の政治学の地図に線ができてしまう、勢力が結びつけられてしまうということがあります。これは後ほど詳しくお話いたします。

2つ目には、Aという大国とBという大国が隣り合わせになっている場合、交渉はAとBのちょうど中間で行われるわけですが、AとBという大国の間にある国、たとえばAの隣りにある国がどちらに行くのがポイントになってきます。つまりAは自分自身に接している国が何かをする場合、たとえばロシアはフィンランドに対して『NATOに入るなetc』ということが言えるわけです。

フィンランド以上に適切な例はウクライナで、この半ば独立したがまだ完全な国家ではないところに他の勢力が入ってくると、これはロシアにとって問題になってきます。つまりウクライナはロシアの隣国であるがゆえに隣国に他の力が来たときには、自分の国に直接力が働く以上に大きなリアクションが起こるということがあります。第二次世界大戦の後半にいろいろな外交が行われましたが、その焦点は大国の隣、自分の隣国をどこが押さえるのか、ここで大きな論争がありました。それが今、露骨な形で起こっています。

その意味で大国というものの定義は、Aという国が、たとえばBという国に対して、Cは自分の隣接国であるからそこに手を出すなという主張をする権利、それを国際社会が認めた場合にそれは大国になると言えるだろうと思います。

もう1つ真空の場合に問題になることがあります。そのポイントは地政学的な意味での同盟国にどうしても頼ってしまうということです。真空が起こっていると、その能力と意図にかかわらずいろいろな勢力が入ってきます。その際に、歴史的にどこが自分たちの敵であるかということがある程度ははっきりしてきます。地政学的に、ここここは必ずぶつかるということがある程度ははっきりします。そうすると自分のライバルと地域レベルでライバル関係にあるところが、基本的には自分の地政学的な同盟国になってきます。敵の敵を味方につけるという簡単な公式があてはまってくるわけです。

ロシアについて言いますと、中国がある意味では潜在的な敵になってきます。トルコもイランも敵になるということがだいたい見えてきます。そうするとこれらの国と拮抗関係にある国が、逆にロシアの同盟国という形で浮かび上がってきます。たとえばインドがそうです。インドはロシアの対外政策において同盟国としての地位をここ数カ月の間にぐっと上げております。またイラクやギリシャ、セルビアも同様です。これらの国々との関係を強めようというのは、実はジリノフスキーがここ1年くらいにずっと言っていることですが、エリツインとコズイレフとの外交はその後を追ってきているようです。ジリノフスキーは過激な発言が多いのですが、つい最近も、インドはバングラディッシュとパキスタンを併合すべきであるとか、アフガニスタンはイランの一部をとるべきであるとか、いろいろなことを言うわけです。それはこの地政学的線に沿っております。これをどうもエリツインの外交が追っている傾向が

あります。これが1つの注目点です。

もう1つ歴史的な話をしますと、ロシアがコーカサスにかけて、また中央アジアにかけて南に下りてくるという路線は、1940年当時と同じ流れです。1940年にフランスが陥落し、イギリスが孤立したときにヒットラーがイギリスに対して『戦争を一時やめよう、新しい秩序を作って折り合いをつけよう』ということを行いました。『イギリスは大英帝国を維持してもよい。しかし自分はヨーロッパを全部とる。ロシアは南東に下りていくがよい』と。最終的にはイギリスとロシアの力はどこかでぶつかることになるのかもしれませんが、一応ヒットラーはそういう申し入れをイギリスにしましたし、また当時のソ連、スターリンに対してもしているわけです。今起こっていることは、どうもそれと同じ流れのようです。ヒットラーのレコメンデーションを、今ジリノフスキーらが、そして場合によってはエリツインが受け入れ始めているように見えます。

エネルギーのパイプライン

次はパイプラインですが、具体的な話としてパイプラインの例を取り上げます。今このカスピ海周辺にある膨大な石油を世界市場に運び出す方法は4つほどあります。中国に流す方法（資料1ルートE）、アフガニスタン経由でパキスタンに運びカラチから流す方法（資料1ルートD）、それからどう流れるかはむずかしいところですが、トルコを経由する方法（資料1ルートC）、それからこれはロシアの線ですが、アストラハンからノボロシンスクへもってきてここから船でブルガリアのバルガスへ運び、そこからギリシャのアレクサンドロポリスに持っていくという方法です（資料1ルートA）。ここは最近トルコが、ポスポラス・ダーダネルス海峡を大きなタンカーの通行を阻止しようとしており、ロシアにとって非常に頭の痛い問題になっております。この4つの流れが

大きなポイントになってきます。

実は、このパイプラインの流れは逆に申しますと、いくつかの勢力がコーカサス、中央アジアに入ろうとする逆の流れと一致しております。たとえばパキスタンやその他中東の勢力が中央アジアに入っていくために、いろいろ働きかけをします。いろいろ条件がありますが、それが揃ってそれなりの力をもつと、石油やガスがそちらに流れてくるとい形になります。中国はまだ潜在的ですが、働きかけを始めております。

トルコも同じです。ロシアの線ですが（資料1ルートA）、トルコやパキスタンのパイプライン（資料1ルートC、D）を阻止した場合に、非常に太い線となってカスピ海周辺の石油を全部ロシアが独占するという流れです。これはグルジア、ウクライナとの関係で、CIS統合の形で後にふれます。

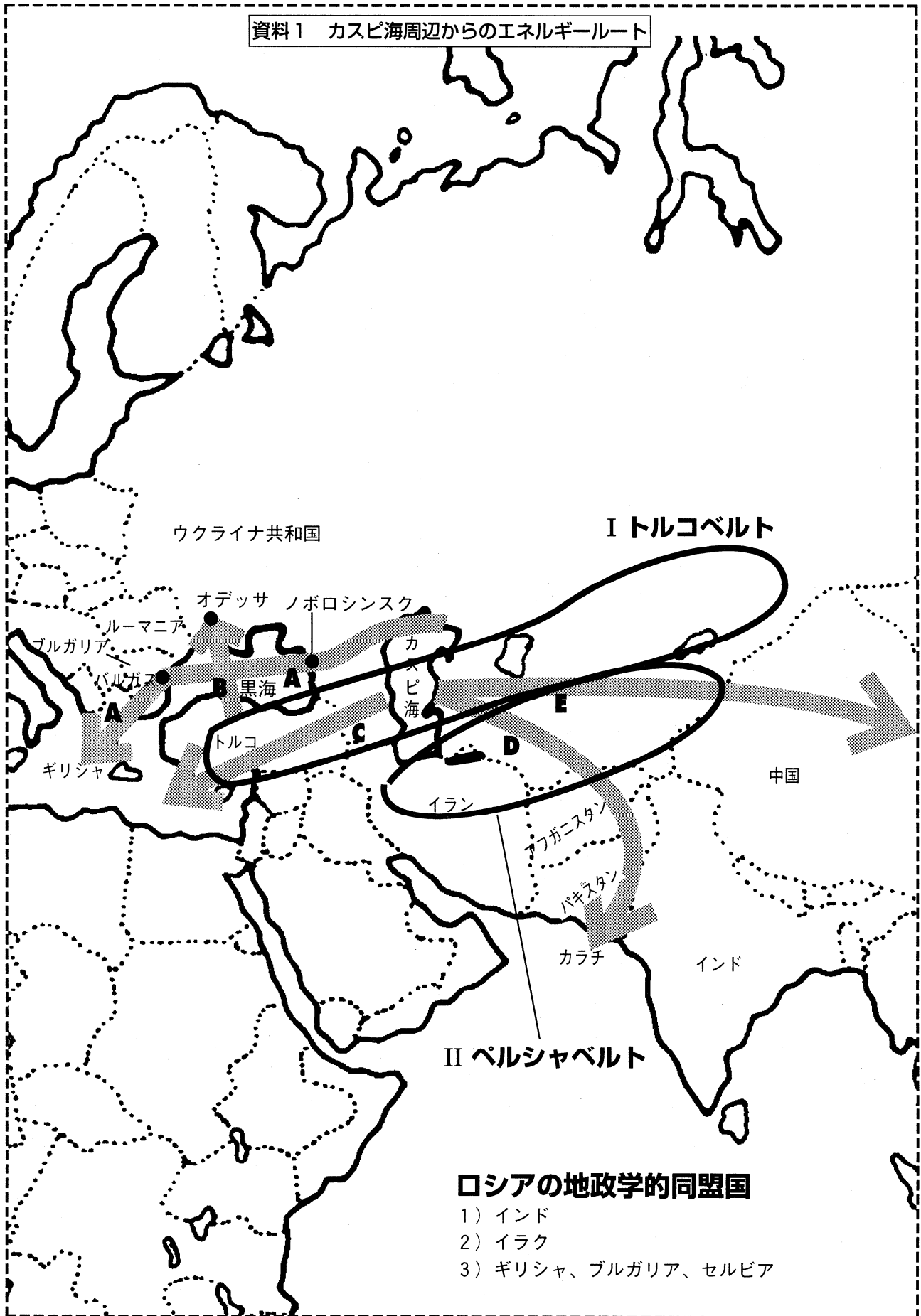
このようにいろいろな勢力が中央アジアの真空、あるいはコーカサスの真空に入り込み、それが成功すると下にエネルギーが流れてくるとい構図がはっきりしてきています。

ロシアの政策－3つの流れ

（資料2参照）

次はCIS統合に話を移しますが、その前に3つの流れについてご説明します。この3つは今のモスクワにとってどのような政策の選択肢があるのかということです。1つ目は帝国主義です。こういう勢力が実際はどこを指すのかというのはむずかしい問題がありますが、おおざっぱに帝国主義的アプローチとしております。それを進める勢力は、今動くべきだと主張します。事態はあまりよくないが、明日はもっと悪い。ソ連邦という大きな帝国があり、それがつぶれてしまった。だからこれはまだ自分のものであるということを他の人間が分かっているうちに、できるだけ取れるものを取った方がいいという考え方です。狭い領域だ

資料1 カスピ海周辺からのエネルギールート



ロシアの地政学的同盟国

- 1) インド
- 2) イラク
- 3) ギリシャ、ブルガリア、セルビア

資料2 3つの流れ

1. 帝国主義

Now

ソ連復活、大ロシア主義、CIS内の政治軍事的統合

Consolidation - Spread Thickly (狭く、濃く)

地政学的思考、スラブ主義

2. ネオエタティズム、コロニアニズム

Now and Later

基幹産業再国有化

旧ソ連内のパイプライン復活

長期的エネルギー開発 (メジャーへの依存度下げる)

産業政策重視

3. 体制以降優先

Later

ロシア中心主義、CIS内限定的経済統合

Extension - Spread mThinly (広く、薄く)

経済安定、金融政策中心

が全部自分のものにできるところをとっておく、現在のボスニアにおけるセルビアの動きにかなり近いと言えます。それに成功すれば、ソ連はある程度小さくなるが復活するだろう。その中で原理は大ロシア主義になる。それからCISを政治的・軍事的に統合した方がいい。地政学的に思考して、地政学的な同盟国と組んで物事をやっていた方がいい。大スラブ主義である。簡単に言うところいう主義ですが、今はあまり強い勢力とは言えないと思います。

1つ飛んで、3つ目は体制移行を優先すべきであるという政策です。つまり市場経済、民主主義体制へできるだけ早くロシアを引き込んだ方がいいという考え方です。これはロシアには人的にも物質的にも資源があり、もともと非常に強い国なのでいろいろな面において潜在力があり、しばらくたつとどんどん強くなる。従って今は下手に動かない方がいい。他の国のこと、CISのこともあまり考えなくていい。ロシアが先に体制移行を成功させるべきであり、CISと統合するのはいいが経済的なものに限り、できるだけ限定的にするべきだという政策です。これを標語的に言うと「広く薄く」手をかけておいた方がいい。後に有利になるので、多くのものを手に入れることができるということです。緊縮予算を組んで、できるだけ世界と同じシステムに入っていた方がいい。当然、IMFから援助をもらった方がいい。そのためにいろいろなことをすべきであるというのがこの派の考え方です。これはソ連邦がつぶれてからロシアの政権担当者が進めてきた政策ですが、このような勢力もまた弱くなっておりま

す。最近見え始めているのがネオエタティズムといえますか、CISに関してはネオコロニアリズムといった政策が出てきております。ソスコベツ第一副首相とか、大統領の警護局長のコルジャコフといった連中がそのグループと言っていると思います。チェチェンを侵攻する際に最も大きな勢力

になったのがこの考え方と言っていると思います。彼らの考え方は、『後に多くのものを取るために今動いておいたほうがいい』という考え方です。基本的には基幹産業再国有化をねらっていると言っていると思います。ただ、彼らにとってまだタイミングがよくないと考えていますので、少し控えています。いずれここへ来るだろうと思います。石油、ガス、アルミニウムなどの資源を国有化しようということです。石油やガスの上がりここでここに投資して、ロシアの基礎体力を強めようという考え方であると言っていると思います。おそらくもう一度このアイデアが出てくると思います。そして特に旧ソ連内のパイプラインを独占するということです。

長期的にエネルギー開発をしようという思惑もあります。メジャーへの依存度を下げてもいい。メジャーの持っている金は当然、石油、ガスを開発する際に非常に重要ですが、妥協しなくてもいい。ゆっくりやってもよいというアイデアも出てきています。ここについては判断のむずかしいところです。できるだけメジャーから搾り取るという単なる政策なのかどうか分かりません。

たとえば1つのコンソウシャムに10のメジャーが入っているとします。それらが厳しい条件を突きつけ、それによってその4つ、5つが出ていっても、そのままメジャーに対して厳しい政策を出し続けています。それによってある石油のプロジェクトは20~30年開発が遅れるであろうということがはっきりしているにもかかわらず、妥協しない政策をとっております。これはメジャーを本当に排除しようとしているのか、それとも駆け引きしているのか、なかなかむずかしいところです。チェチェン侵攻と同時期、ちょうど11月~2月にかけて、旧ソ連、特にロシア内のガスや石油の開発政策が変わってきています。今述べたようないろいろな問題が起こっています。それから産業政策の重視というのはいままでもないと思います。

こういう3つのオプションがあり、1.(帝国主義)と3.(体制移行優先主義)が弱まり、2.(ネオエタティズム、コロニアニズム)が強まってきた。それがこのチェチェンの事件と関係しているということが言えるかと思えます。シナリオを書く場合、ベストケースシナリオとワーストケースシナリオの真ん中あたりにマドリングするのが通常ですが、どうも今回は真ん中ではなく、場合によっては西側にとってのワーストケースシナリオが来そうだという感じがします。

CIS統合とソ連(ロシア)の復活度

(資料3参照)

まずソ連の復活度についてですが、1992年にCISというものが成立した時に、それらを3つのグループに分けることができました。Aグループは、ロシアからなんとしても出ていくという勢力です。Bグループは、ロシアには依存するが、それ以外にも依存する国をつくりたい。その両方と等距離を保ちながら進んでいきたいという勢力です。Cグループはロシアに依存して生きていきたい。もしくはソ連邦を復活させたいという勢力で

資料3 ソ連(ロシア)の復活度

CISの変化—ロシアを除く14ヶ国、どの程度の独立を望むか

(a 連邦の結びつき復活、b ロシアのリーダーシップ受容)

1. 成立当時

独立志向	バルト3国(エストニア、ラトビア、リトアニア)	
Aグループ	グルジア	—4ヶ国
等距離志向	モルドワ*、アゼルバイジャン*、ウクライナ、ベラルーシ	
Bグループ	—4ヶ国	
ロシア依存	アルメニア、カザフスタン、キルギスタン、ウズベキスタン、	
連邦復活志向	トルクメニスタン*、タジキスタン*	—6ヶ国
Cグループ		

2. 94年12月

Aグループ	バルト3国	—3ヶ国
Bグループ	なし	
Cグループ	グルジア、ウクライナ、ベラルーシ、モルドワ、アルメニア、カザフスタン、キルギスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、トルクメニスタン*、アゼルバイジャン*	—11ヶ国

3. 今、見え始めている傾向

Aグループ	バルト3国	
「潜在的」Bグループ		イ) トルクメニスタン、アゼルバイジャン ロ) グルジア(潜在的)、ウクライナ

(イ)とロ)がパイプラインで結ばれれば、CIS内ロシア対抗グループ成立)

Cグループ		1) ベラルーシ、カザフスタン 2) アルメニア、キルギスタン、タジキスタン
	ロシアを中心とするCIS統合の第1グループ	ロシア、ベラルーシ、カザフスタン
	第2グループ	1) プラス2)

KEYはウズベキスタン、モルドワはルーマニアと再接近の兆し

す。

成立当時は、独立派であるAグループにはバルト3国とグルジアがおり、等距離志向のBグループはモルドワ、アゼルバイジャン、ウクライナ、ベラルーシの4カ国、Cグループはその他ということでした。現在それがどのように変化しているかということ、Aグループのロシアから独立して進みたいというグループはバルト3国のみであり、成立当時にはあった等距離志向のBグループは、分け方は非常にむずかしいのですが、基本的にはなくなったと言っていいと思います。つまり、ほとんどがCグループになってしまったということです。(資料3中段)

ソ連邦の解体後にCISが登場しましたが、そのCISに入っていないこのバルト3国のみが真の意味で独立し、他の地域は事実上独立できていないという状況が今日現れたということまで前回お話しいたしました。しかし、その意味でロシアによるCISの統合、ある意味でソ連邦の復活というものはこの2年間にはっきりとした傾向として現れてきているものの、いくつかまた逆戻しが見えます。もう一度ロシアから離れていこうという遠心的な流れが出始めています。そこで、現在見始めている傾向についてご説明したいと思います。(資料3下)

Aグループはバルト3国のままであり、ここは非常にはっきりとロシアと別に生きていくという路線を走っております。いくつかの選挙があり、エストニアでも旧共産党に近い部分が勝つなど新しい変化はありますが、基本的にはモスクワのコントロールから出ていくと思います。

Bグループですが、先ほど去年の12月の段階でBグループは消滅したと申しましたが、どうも潜在的なBグループがまた成立し始めているようです。1つはトルクメニスタンであり、もう1つはアゼルバイジャンです。アゼルバイジャンはチェチェン紛争に、反ロシアの形で荷担したことはほ

ぼ間違いありません。トルクメニスタンもロシアとある意味で“パイ”の関係を保っているわけですが、全体的にはCISの中でロシアの影響力が強くなることをきらっていることは間違いのないと思います。ロシア依存という面もありますが、これは明確にウズベキスタンの脅威とバランスをとろうとしているからです。

それからグルジアですが、最初はAグループにいましたが、アブハジア紛争を機会にシュワルナゼが出てきて、突然Cグループに入りました。しかし今のままでいくと、もう一度ロシアと距離を置きそうな状況になってきました。しかも、ここ1年以内に大きな紛争が起きる可能性が出始めております。

ウクライナは、クラブチェフという独立路線を打ち出している大統領が選挙で破れ、クチマというロシアと関係を強化しようという人間が大統領になり、アゼルバイジャンのアリーエフと同じように一度親ロシア路線を歩み始めるわけですが、しだいにまた独立傾向を強めております。

このように、4つの国が焦点になってきています。で、トルクメニスタンは中央アジアの国であり、アゼルバイジャンはコーカサスの国であり、グルジアはロシアの南側にある国であり、ウクライナはロシアの南西にある国です。この4つが結びつくと、CISのロシア政治経済を中心とする統合の中でちょっとした対抗グループとなりえます。これらをパイプラインで結ぶというアイディアは、今動き始めています。これら4国は地理的にも1つのかたまりとなっています。

Cグループにも、非常に大きな変化がここ数カ月の間で見られています。ベラルーシとカザフスタンがロシアとの関税同盟ということですが、事実上ロシアが、特にベラルーシの場合は統合する形になってきております。軍事面でも経済面でもロシアの支配を受け入れるということです。カザフスタンはまだ微妙ですが、ベラルーシは非常に

はっきりしてきております。それに対してタジキスタンは、ベラルーシ、カザフスタン、ロシアの同盟をミニ・ソ連邦の復活と表現とするならば、それに入りたいということを表示しております。キルギスタンに関しては、ミニ・ソ連邦にキルギスタンを入れてもいいのではないかと、特にロシアはそう考え始めております。アルメニアはトルコとの関係、アゼルバイジャンとの関係があって、すぐにこれを入れるのは問題がありますが、基本的に入れていくという方針です。まずベラルーシとカザフスタンでCISの非常に強固で急速な統合が行われ、それにじわじわとタジキスタン、キルギスタン、アルメニアがついていくというような分裂傾向が起っております。

今後KEYとなるのは、ウズベキスタンがどこに行くのかということです。前回申し上げたとおり、ウズベキスタンが今後の旧ソ連を見る際の非常に大きな鍵を握っている国なのです。独立傾向がある程度ある。治安も非常に強権で抑えている。経済の再建も旧ソ連の中で、バルトを除いて一番うまくいっている。経済の落ち方が急速に減っており、もうすぐプラスに転じそうな勢いです。今エリツィンがウズベキスタンをモデルとしていると言っていいほど、ウズベキスタンの力は上がり始めています。これがどちらにつくのが非常に問題です。

モルドワはルーマニアとの再接近の兆しが少し見えております。ここには問題の沿ドニエステルという地域があり、以前はここがロシアの飛び地のような地域で、1992年に大きな紛争があったことはご承知のとおりです。ここにレベジというロシア第14軍のロシア人将軍がおりますが、彼が来年の大統領選挙に出てきそうです。私の勘では彼はいずれ大統領になるのではないかと思います。人気投票ではまだ3～4位くらいですが、彼は1987～89年あたりのエリツィンと同じように、本来ならばもうすでに政治的、もしくは肉体的にも

抹殺されてしかるべき状態に二度三度と陥りながらずっと生き延びています。しかも、『名誉のためには死を辞さない』という態度を貫き通しており、これがある種の神話になりつつあります。こういうものが混乱期には非常に重要ですが、彼のみがある種のカリスマを示している、つまり、自分が奇跡を起こすことを実証しながら上がってきている人間です。エリツィンの側近は必ずやレベジ失脚をねらうでしょう。どうもモルドワは、レベジとあわせて少し問題になりそうです。こういう変化が最近起こってきております。

中央アジアのベルト

(資料1参照)

次に2つほど大きな変化が起こりそうな点を申し上げます。1つはタリバンという学生運動で注目を浴びているアフガニスタン、この辺が今後どうなるかという問題と、グルジアが非常に大きく動く可能性がありますのでお話しさせていただきます。

中央アジアには2つのベルトがあると言えます。1つはトルコのベルトであり、そこにはトルコ系の国が5つあります(資料1-I)。アゼルバイジャン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、キルギスタン、カザフスタンです。アゼルバイジャンはシーア派でその意味でイランにも近いのですが、さて、このベルトの弱さは、第1にトルコの経済力がそう強くないということがあります。第2にこの真空の政治学の場合に非常に重要ですが、カスピ海とイランとに隔てられ、中央アジア地域に直接隣接していないということが非常にトルコにとってハンディになっております。

もう1つはペルシャのベルトです。どうつながるかといいますと、アフガニスタンの今の大統領であるラバーニが北部のタジク族であり、つまりペルシャ系です。そういう意味でアフガニスタン北部とイランが、地続きのイランベルトとなっております。それからここにタジキスタンという国

がありますが、ここもペルシャ系です。その意味ではこの3つが、こういう形で陸続きでベルトを作っております（資料1-II）。

今問題になっているのはタジキスタンです。ポイントは、今は旧ソ連に近い部分がこのタジクを抑えていることです。「南」と同盟を組みそうなタジク内の勢力はガラムという勢力ですが、1992年から93年における内戦によって敗北し、今はアフガニスタン北部に入っております。アフガニスタンのラバーニ勢力と現タジク勢力とは民族的には同じですが、政治的にぶつかっております。そのために、ペルシャのベルトが今のところできないわけです。ところがガラムやパミール系が勝利し、そこが変われば、このベルトが急速にできるだろうと思います。もしこのベルトができると、何が起こるのか。タリバンという勢力はパシュトゥーン族であり、ヘクマチアルもまたパシュトゥーン族ですが、タリバンが攻めてきたときにヘクマチアルは戦わずして逃げたわけですが、このタリバンというパシュトゥーンとタジクとの間に戦争が起こり、今はタジクの方が優勢です。しかしパシュトゥーン族の方が多数派ですから、もう少し強くなってきてカブールを抑えることになる、ウズベクに近いところのアフガンとアフガンのタジク系は独立国を事実上つくってしまうと思います。その後タジクで何が起こるかが1つのポイントです。

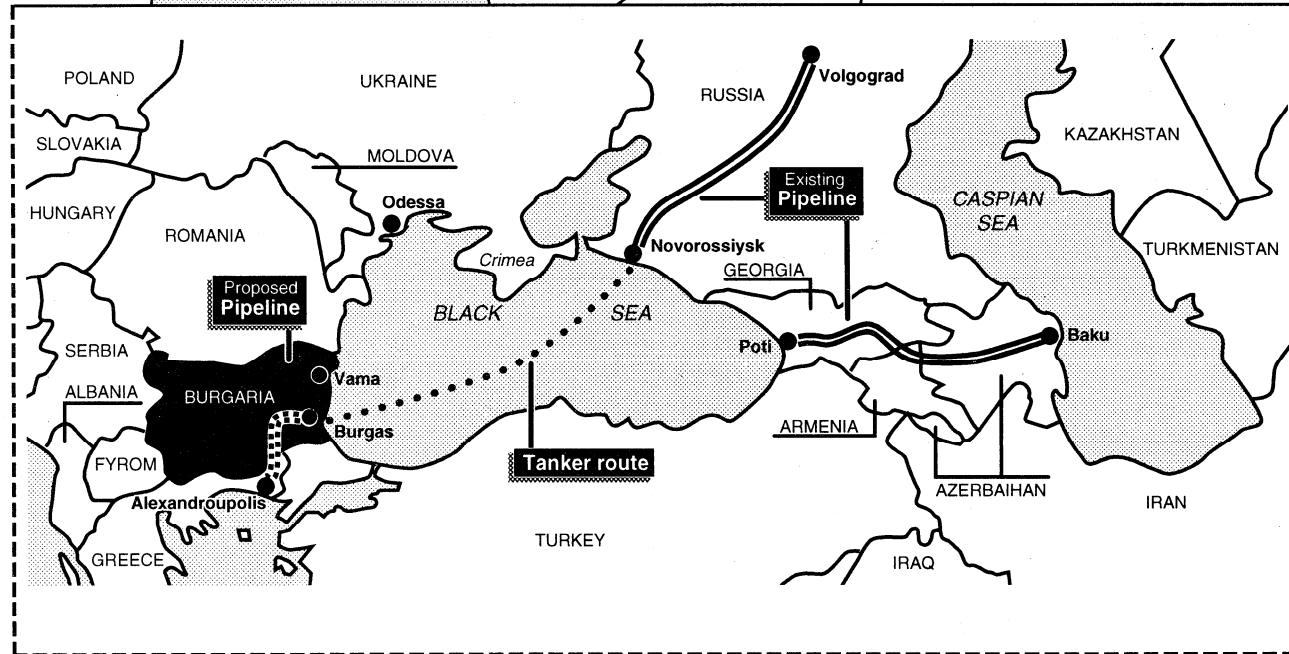
もしそのような構図ができた場合は、北東部はタジク族、北西部はウズベク族によってとられてしまうわけですから、アフガニスタン自身は小さくなってしまい、小アフガニスタンができることになります。しかし、これに甘んずることはあり得ないだろうと思います。そうすると、パシュトゥーンだけで国を作ろうということになるはずですから、パキスタンの北部にいるパシュトゥーンまで引き入れることになります。それによって、アフガニスタンが南に下りてくるという形になり

ます。そこで弱いのは、今政治的にどちらに行くか分からないパキスタンです。パキスタンはそのときにインドからカシミールやパンジャブでいろいろな攻撃を受けると、消えてしまう可能性があります。これについてジリノフスキーはインドにそうせよとけしかけているわけです。そういう意味でこのパキスタンが、アフガニスタンと合わせて焦点になってくるだろうと思います。

グルジア問題とチェチェン侵攻

次はグルジアの話をしていただきます。なぜチェチェンにあの時期に侵攻したのかということの1つ目の答は、間違いなくモスクワの権力闘争、チェチェンの権力の問題があります。ここをとるのか、とらないのかという問題です。

2つ目は、アゼルバイジャンにある石油をどう流すのかということが大きく関わっております。もし、ドゥダーエフのチェチェンがアゼルバイジャンからの石油パイプラインを支配しますと、ここから北ルートで流すパイプラインを（資料4-A）、ロシアのコントロール下におくことができないわけです。ここがロシアの支配下に入らなければ、非常に大きな可能性として、アゼルバイジャンの石油をグルジアからトルコを通してもってくるというアイデアが実現することになります。もっと簡単にはグルジアのバツミまで運び、ここから今イラクに対する制裁で閉鎖しているパイプラインまでもってくる、簡単に流すことができます（資料4-B）。もしくはトルクメンのガスと合わせて、また場合によってはカザフのテングスと合わせて、中央アジアの石油をバツミに流すという、ロシアにとって一番嫌なシナリオができるわけです。したがって、ここを抑えるか抑えないかということは、中央アジアとコーカサス全体にある石油を上から流すのか（資料4-A）、それとも下から流すのか（資料4-B）というロシアの将来にとって死活の問題に関わってくるわけ



です。

イランとカスピ海があるので、コーカサスと中央アジアは分裂しているわけです。ところがコーカサスと中央アジアの上側は、ロシアもしくは旧ソ連ですから、こういう形でつなぐことができます（資料4-C）。上から見ると、コーカサスと中央アジアはロシアの領土でつながっています。しかし、下から見るとイランとカスピ海があるのでつながっていないわけです。そういう意味で、ロシアのこういう形で石油やガスを流していくというプラン（資料4-A）は有利です。しかしいろいろな観点から見ると、こう流した方（資料4-B）が当事国にとっては非常にいいわけです。ロシアによってそのパイプラインをコントロールされたいですみますし、売りたいところに売ることができます。上から流しますと金の回収できないCISに売らざるえないので、このように流して両側に売りたいわけです。その意味でチェチェンの問題はいわばネオコロニアリズム、すなわちパイプラインを独占してロシアを復活させようとする勢力にとってみると、非常に痛いどに刺さったトゲであります。石油・ガスの開発が進みますので、パイプラインのルート設定は緊急の問題なのであります。

なぜ今グルジアが問題なのかということ、シュワルナゼが老人になったということ、かなり重度の糖尿病になっているからです。もう政治生命は1年ないのではないかと言われています。グルジアは成立当時は独立派であり、バルトといっしょにCISを蹴った国です。それがアブハジア紛争やオセチア紛争である意味で非常に形を変えた侵略をロシアから受け、ギブアップして、シュワルナゼが入ってきて、『名誉よりも胃を満した方がいい』という政策が勝ったわけです。しかし、シュワルナゼがいなければグルジアはロシア依存派にとどめるリーダーがいません。国内にはかなり反ロシア感情があります。政治家もほとんどが反ロシア

ですが、シュワルナゼが『そういうことをいうならば俺はやめるぞ』という脅しを使いながら何とかもちこたえてきたわけです。もしシュワルナゼが辞めたり亡くなったりした場合、後に3人ほど政権に就く可能性があるリーダーがいます。そのうちの1人は多少ロシアに忠誠を尽くす可能性がないわけではありませんが、しかし、後の2人は確実に反ロシアになると思います。そうなったときにまたもう一度大きな問題が起こると思います。

石油をこのように（資料4-A）ポチに運び、そこからノボロシンスク～バルガス～ギリシャといった地政学的な同盟国路線で通すのがロシアの計画ですが、ポチから、ノボロシンスクへもってくるのも、直接グロズヌイ経由でノボロシンスクへもってくるのも、ロシアにとっては非常によいアイデアです。しかしこれを進めそうな政治家はグルジアでは政治的に勝てそうにないということが言えます。バクの石油をアルメニアを通してもってくるという計画ももちろんあります。アメリカのアルメニア・ロビーが非常に強いのでこういう動きもありますが、今最も簡単なのはパツミ・ルートです。ここはアゼリア自治共和国で、グルジアの中のイスラム圏です。ここには先日行って来ましたが、生活レベルではすっかりトルコの影響下に入っています。政治的にはここだけが1つの無風地帯です。

現在グルジアは非常に貧しい状態になっております。たとえば平均給与が1ドルという状態です。ここにパイプラインが入ってきた場合にはトルコの勝利ということになるので、ロシアはこれを阻止しようと動くはずですが。

この意味でグルジアが非常に焦点になっています。グルジアが反ロシアにいきますと、アゼルバイジャンとグルジアがパイプラインで結びつき、それにトルクメンがついてきます。そうするとパツミから下に降ろすのみならず、オデッサとい

ウクライナの都市に流す計画があります。イランからも原料をもってきてオデッサに流し、それからウクライナ国内に運ぶという計画です。ウクライナはエネルギーがロシアから来るのかそれともそれ以外のところから来るかによって、独立が保たれるか保たれないか、今ぎりぎりのところにあります。そういう意味でこのパイプラインができるとトルクメニスタン、アゼルバイジャン、グルジア、そしてウクライナという潜在的なロシア対抗4カ国が結びついてしまう可能性があります。これが起こりそうな場合にロシアは必ず何かをするというのが私の勘です。

チェチェン紛争の3つめの意味はロシアが1つの時代を画そうとした事件だということです。今まではソ連邦というものがあり、それがつぶれた。そのつぶれたものをどう自分の側へ引き寄せるのかということが問題でした。BグループやAグループにいたものが全部Cグループに入った過程がありましたが、どのようにしてCグループ、つまりロシアに忠誠を誓うグループに入ったのでしょうか。ロシアは紛争を利用したわけです。クリミアやアブハジアをはじめいろいろところで紛争が起こっており、その紛争を使ってモスクワのコントロールを受けまいとするCIS諸国を、にっちもさっちもいかなないようにする。それから、石油やガスを売りつける。それで借金をたくさん作っているんなものを買ひ足すという形でつぶしていったわけです。その意味で紛争はロシアにとって好ましいことでした。つまり新興諸国の領土的保全を破ることは、ロシアにとってプラスだったのです。

そのようにしてロシアは力を再び戻したわけですが、これがずっと続く問題が起こります。領土的保全というものはあり得ない、これは“カラ文句”であるということになると、ロシアにまで波が来ます。つまりどこかがロシアから独立したいと言ったときに、領土保全原則があり、『いか

ん』とは言えないわけです。チェチェンが特に典型的な例です。その意味ではチェチェンの事態を放置するということは、ロシアの領土保全をある意味で一時的に放置するということになります。しかしこれを放置しておいても、他のところでロシアが仕掛けた紛争によってロシアの権威コントロールが強まるというプラスが戻ってくるわけですから、プラスマイナスすると領土保全の原則についてあまりとやかく言わない方がロシアにとって好都合だったのです。94年の12月の段階で、私はロシアはバルト以外はほぼ全部取り戻すチャンスを得たと申しました。ということは逆にシグナルで言うと、ここからは『固めた方がいい』わけです。つまり領土保全は重要だということを言う必要があるわけで、その意味で他ならぬロシアが圧倒的な軍事力でチェチェンに入る必要があったのです。

つまり、チェチェンを動かしたということはソ連にとっては1つのシグナルであり、ロシアは後に経済的な手段を使ってCISを統合する準備ができた。従って、ここで分離や領土変更などを求める連中は抑えた方がいい、そういう流れは食い止めた方がこれからはいいと判断し、そのシグナルを送るためにチェチェンに入ったと言えます。そして、それに失敗したということが1つのポイントです。つまり、ロシアにとってよくない方向に進んでおり、いくつかの対抗グループも出てきているということが言えます。このとばかりがいくつか出てくると思います。

ロシアがチェチェンに入ったことにより、アブハジアにグルジアの勢力が失地回復を求めて入ります。クリミアでもウクライナが同じことを起こしつつあります。モルドワでもそういうことが起こっています。ロシアがチェチェンに入るなら、俺達も失われた領土を取り戻したいと言って入り始めるといった現象が起こってきたわけです。

総括

まとめに入ります。今この地域では、真空の政治学という普通と違う現象が起きているということを理解すべきであり、その際には相対的な力で物事が急速に動くような状況です。そうなると、地政学的思考がどうしても強くなり、地政学的な同盟国に頼りがちになってしまう、そういう形で動いてしまうということです。つまり、歴史がもう一度浮かび上がってくるという傾向があります。これが第1の点です。

第2点目は、西側の目から見るとロシアが本当に悪い方向に進んでいくとするならば、コーカサスと中央アジアのすっぽり空いているこの空間を何とかした方がいい。つまり、イランに対するアメリカの政策等をもう少し考えて、下の南側でつなげなければ、必ずロシアによって上からつなげられてしまうということです。

第3点目はトルコが内政的に動き始めていることであり、これも要注意です。アゼルバイジャンとトルコは盟友ですが、場合によってはアルメニアの辺りをめぐって地域紛争が起こるかもしれません。もし起こった場合、つまりトルコとアルメニア間で武力衝突が起こった場合、アルメニアはロシアの非常に忠実なCISの国であり両国間の軍事演習なども盛んですので、CISとNATOとの間の戦争が起こる可能性があるということです。

第4点目はグルジアが危ないということであり、第5点目はパキスタンが場合によっては消滅することまで含めて動く可能性があるということ、モルドワ、ルーマニアがもう一度動くだろう

ということです。

それからやはり石油のパイプの問題が非常に重要です。特にソ連の政治を見るときには石油の存在が非常に重要であって、スターリン化の問題についても、60年代、70年代についても、ロシアにとって石油が非常にあるということが普通ではできないことを可能にしているのです。その意味で非常に重要です。たとえば西側からの援助が今ロシアに流れ込んでいますが、ロシアに数ある石油・ガス会社がきちんと税金を払いさえすれば援助の必要は全くありません。またパイプラインの漏れがありますが、この漏れが全部なくなれば、西側からの援助をすべてまかなうことができます。そういうものが保守派のネオエタティズムを首謀する人間の頭にあって、頼る必要がないという政策が出てくる可能性があるということが第6点目です。

第7点目はウズベクがロシアのモデルになりつつあること、そしてそのウズベクがどちらにいくかが焦点であり、下にいくか上にいくかで非常に変わるということです。

最後はワーストケースシナリオについて。まずロシアでネオエタティズム派が勝利をする。中近東、OPECでも非常に大きな流れがあり、イスラムファンダメンタリストが強くなる。ロシアのネオエタティズム勢力とイスラムファンダメンタリストの影響を受けたOPECとの間で生産調整が行われた場合、非常に西側にとってまずいことになります。

以上